様　式　C－19、F－19－1、Z－19　(共通)

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　4 年　　6 月 21 日現在

機関番号： 14301
研究種目： 若手研究(A)
研究期間： 2017～2020
課題番号： 17H04769

研究課題名（和文）精神分析理論をもとにした『狂気と創造性』の問いをめぐる包括的な思想史的研究

研究課題名（英文）A Comprehensive Study of the Relationship of "Madness and Creativity" Based on Psychoanalytic Theory

研究代表者
松本　卓也（Matsumoto, Takuya）

京都大学・人間・環境学研究科・准教授

研究者番号：90782566

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、西洋思想における「狂気と創造性」の問題をめぐって行われた。この2つを関連付ける議論はプラトンの時代からあるが、その神的狂気の議論に始まり、次第にメランコリーが創造性と関連付けられるようになる過程が検討された後、デカルト、カント、ヘーゲルらの議論における狂気の取り扱いを、フーコーが述べた17世紀のおける「狂人の監禁」とその文学における回帰として論じた。さらに、ヘルダーリンを中心にこの問題が統合失調症（精神分裂病）という病との強い関連のもとで捉えられるようになった過程を検討した。また、20世紀の思想におけるハイデガーの「詩の否定神学」の議論に対する応答としてフランス現代思想を再解釈した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまでの西洋思想史においては「メランコリーと創造性」についての研究は一定の蓄積があるが、射程を「狂気」にまで広げ、特に近代以降に出現する統合失調症を患っていたと考えられる傑出人についての病跡学的検討とそれらの研究を結びつけるものはほとんど見られなかった。本研究では、狂気の問題に着目したフランス現代思想の立場から、病跡学という学問について批判的に検討し、さらに西洋思想史を通覧することで、「狂気と創造性」というテーマについて一定の思想史を描くことができた。また、研究成果については一般向け書籍や、国内海外における公開シンポジウムの形で広く社会に向けて成果発表を行うことができた。

研究成果の概要（英文）：This study was conducted on the issue of "madness and creativity" in Western thought. After examining the process by which divine madness and melancholy gradually came to be associated with creativity, the treatment of madness in the discussions of Descartes, Kant, Hegel, and others was discussed as a return to Foucault's "confinement of the madness" in the 17th century, and its return in literature. We also examined the process by which this issue came to be viewed in the context of schizophrenia (schizophrenia) with a particular focus on Holderlin. We also reinterpreted French contemporary theory as a response to Heidegger's discussion of the "negative theology of poetry" in 20th century thought.

研究分野： 思想史

キーワード： 精神分析　狂気　創造性　病跡学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

「狂気と創造性」の関係は、精神医学と人文科学の両方から論じられてきた学際的な学問領域であるが、近年はかつてほどの成果を出せていない。その理由の一端は、かつてのアプローチが「統合失調症（スキゾフレニア）」に主軸をおくものであったため、より現代的な自閉症スペクトラムや倒錯の一般化といった新たな病態から人間の創造性に光を当てることがいまだ不十分であることにある。そこで本研究では、フランスの精神分析家ジャック・ラカンと現代の最新の精神分析理論をもとに、「狂気と創造性」の問題に新たな視角からアプローチし、人間の創造性と「病からの癒やし」の関係を明らかにするとともに、この問いの思想史的系譜を明らかにする。

２．研究の目的

本研究は、平成 28 年度から助成を受けた研究活動スタート支援の課題「『狂気と創造性』の問いをジャック・ラカンの精神分析理論をもとに発展させる試み」をさらに発展させ、ふるくから論じられてきた「狂気と創造性はいかに関係するのか」という問いを、ジャック・ラカンの精神分析理論をもとに発展させ、この問いの系譜を西洋思想史のなかに位置づけなおし、現代における創造性のあり方を明らかにし、創造行為や芸術療法を賦活していくための理論的基盤をつくることを目的とした。

３．研究の方法

本研究は、西洋思想における「狂気と創造性」の問題をめぐって行われた。この 2 つを関連付ける議論はプラトンの時代からあるが、その神的狂気の議論に始まり、次第にメランコリーが創造性と関連付けられるようになる過程が検討された後、デカルト、カント、ヘーゲルらの議論における狂気の取り扱いを、フーコーが述べた 17 世紀のおける「狂人の監禁」とその文学における回帰として論じた。さらに、ヘルダーリンを中心にこの問題が統合失調症（精神分裂病）という病との強い関連のもとで捉えられるようになった過程を検討した。また、20 世紀の思想におけるハイデガーの「詩の否定神学」の議論に対する応答としてフランス現代思想を再解釈した。

４．研究成果

プラトンは、『国家』のなかで、後に「詩人追放論」と呼ばれる議論を展開している。プラトンによれば、詩人や画家は真なる存在者をうみだすのではなく、幻影（シミュラクル）を生み出す存在である。すなわち、詩人や画家は模倣を行う者であり、それゆえに真理からは三段も遠い存在であると考えられたのである。では、プラトンは芸術の価値をまったく認めなかったのだろうか。そうではない。彼は『パイドロス』のなかで、エクリチュール（書くこと、書き言葉）よりもパロール（話すこと、話し言葉）に優位をおきながらも、エクリチュールが善いものとなりうる条件を検討している。彼によれば、善いエクリチュールとは神から魂に書き込まれるものであって、それは狂気を通じて生まれてくると考えた。すなわち、「神から吹き込まれた狂気」であることが、善きエクリチュールの条件であるとされたのである。後にジャック・デリダは、「神から吹き込まれた狂気」を偏愛する特定のエクリチュールのみに真理としての価値をみとめるプラトンの議論に意義を申し立てている（「プラトンのパルマケイアー」『散種』所収）。また、ジル・ドゥルーズは、『パイドロス』にみられる狂気のエリート主義を批判した（「プラトンとシミュラクル」『意味の論理学』所収）。結局のところ、『パイドロス』では神＝父という「善い基礎のある」狂気のみが称揚され、父に反するような狂気は見事に切り捨てられているというのである。西洋思想史がその始まりにおいて排除したこの反-父的な狂気の問題は、後にドゥルーズの『批評と臨床』のなかでとりあげられることになる。
アリストテレスは『問題集』第 30 巻のなかで、「哲学であれ、政治であれ、詩であれ、或いはまた技術であれ、とにかくこれらの領域において並外れたところを示した人間はすべて、明らかにメランコリー症者である」と述べた。プラトンが芸術家をいわば原-狂気という未文化な狂気と関連付けたとすれば、アリストテレスは芸術家や天才をメランコリーというより細分化された狂気と関連付けたのである。
プラトンが扱った狂気が未文化な「原-狂気」とでも呼ぶべきものであったとすれば、近代以降、西洋思想が中心的に扱う狂気は主として統合失調症（精神分裂病）である。例えば狂気の分類を試みたこともある哲学者イマニュエル・カントは、いわゆる超越論的統覚を論じる際に、統合失調症の病理（自我障害）に肉薄する記述をしている。すなわち、人間の頭のなかに湧いてくる表

象には、つねに「私が考えている（Ich denke）」という表象（統覚）が伴っていなければならないが、もしこの「私が考えている」という表象が伴わないとき、頭のなかに湧いてくる表象は「私の考え」であることをやめてしまう。すると、他者が私の代わりに考えたり（思考伝播）、所在不明の観念が頭のなかで乱舞したりしはじめることになる（種々の幻覚）。また、坂部恵や内海健はカントの哲学の背景に、スキゾフレニック（統合失調症的）な契機がみられることを指摘している。
19 世紀以降になると、ヘルダーリンやアルトーといった作家たちにスキゾフレニックな狂気が突如として噴出してくる。ミシェル・フーコーは、この「狂気の噴出」の原因を 17 世紀以降におこった「狂人の監禁」という原理的選択に見定める。すなわち、近代以降に監禁され排除されたものが、あたかも「排除されたものが回帰」するように、19 世紀以降の作家における創造性として再出現してきたのである。この意味で、カントにおける狂気の問題は統合失調症の時代の到来を予見するものであったといえる。
また、19 世紀は、精神医学が近代的な科学として成立した時代でもある。さまざまな精神症状や精神疾患の分類が議論され、近代精神医学が成立していくなかで、狂気と創造性の問題にも新たな光があたりはじめた。20 世紀に入ると、精神医学はより現代的な姿をとりはじめる。ちょうどこの頃、ドイツの精神科医メービウスが、狂気と創造性の問題を扱う学問領域に「病跡学（Pathographie）」という名前を与えた。1913 年に『精神病理学総論』を著し、現代精神医学を方法論的に基礎づけたカール・ヤスパースは、1922 年に『ストリンドベリとファン・ゴッホ』を著し、統合失調症者における創造性の問題を緻密に位置付けた。彼は、統合失調症者においては一時的に「形而上学的な深淵が啓示される」ことがあり、これが病者の作品を特異なものすると考えた。同じ 1922 年には、ヨーロッパ各地から患者の絵画を収集していたハンス・プリンツホルンが『精神病者の芸術性』を発表し、彼らの絵画を分析してもいる（なお、プリンツホルンらの発見したいわゆる「アウトサイダー・アート」は、マックス・エルンストを経由してシュルレアリスムに影響を与え、本邦においては式場隆三郎らの精神科医に影響を与え、山下清を見出すに至った。） 1929 年にはエルンスト・クレッチマーが『天才の心理学』を、1931 年にはヴィルヘルム・ランゲ＝アイヒバウムが『天才――創造性の秘密（天才問題）』を著し、狂気と創造性の問題が盛んに論じられるようになる。本邦において病跡学や狂気と創造性の問題を扱った論者としては、やはり宮本忠雄と中井久夫の業績が特筆されよう。彼ら二人による狂気と創造性をめぐる論点は多岐にわたるが、ヤスパースと同じく、やはり「超越的な世界を目指す」ことや「通用言語の持つ覆いを取り除いて、その基盤を露出する」ことといった形而上学的な深淵の開示を統合失調症者の作品にみとてっている。
プラトンは、「神から吹き込まれた狂気」であることを善きエクリチュールの条件であると考えた。この考えは、中世にはいくつかの例外を除いて一時的に忘れ去られたが、近代以後、統合失調症という形をまとい、19 世紀には様々な作家や画家の事例に再びみいだされるようになった。しかし、このことは、単にギリシア的な狂気の世界が近代に回帰してきただけのものではない。そのことをまざまざと示してくれるのが、後期ハイデガーが取り組んだ詩論、とりわけヘルダーリンやトラークルの詩を論じる一連の論文（『言葉への途上』所収）である。ハイデガーは、かつては神の言葉の現前があったが、今では語が欠けていると論じる。すなわち、プラトンが『パイドロス』で論じたように、古の時代の創造性には「神の言葉が吹き込まれる」契機が存在していたのだが、神の死、父なるものの死を経た現代では、もはや神の言葉が直接的に吹き込まれるようなことはありえなくなったというのである。
では、そのような時代にいかにして文学作品（詩）は作られうるのか。ハイデガーは、偉大な詩人は「いつまでも語られないままの唯一の詩」からすべての詩を作る、と述べている。すなわち、根源において詩の言葉は欠如しているのだが、いわばその周囲を経巡るようにして詩作は可能なのであり、むしろその決して現前しない欠損した言葉への忠実さが、詩人の偉大さを決めるのである。「隠れたる神」すなわち神が現前しなくなった時代においてなおも神を問題とするようなこの考えを、私たちは「詩の否定神学」と呼んでもよいだろう。
50 年代にはハイデガーの圧倒的な影響下にあった精神分析家ジャック・ラカンの精神病論には、ハイデガー的な「詩の否定神学」に相当する考えが頻出する。1932 年の学位論文のなかで発表した症例エメにすでにその萌芽はみられるが、ここでは特に 1958 年に書かれた精神病論「精神病のあらゆる可能な治療の前提的問題について」に注目しよう。精神病者は、象徴界を統御する〈父の名〉のシニフィアンが欠けている。そして、人生の節目や転機においてこの〈父の名〉のシニフィアンに依拠するように要請されるとき、精神病が発病する。そのとき、〈父の名〉のシニフィアンに相当する穴の周囲のシニフィアンが、穴の存在を暗示するように活発に歌い始め、それが精神病者の幻聴に相当するというのである。すなわち、ハイデガーにおける欠損した言葉＝現前しない神とその周囲を経巡る詩作という議論は、ラカンにおける〈父の名〉のシニフィアンの欠損とその周囲のシニフィアンの活性化とまったくの同型をなしているのである。そして、精神病者の人生行路は、その欠損したシニフィアンの場所へと突き進むような形で展開していくと考えられた。
ラカンとハイデガーを近づける線はもうひとつある。ラカンは、自らの精神病論をシュレーバーの『ある神経病者の回想録』の読解によって作り上げた。ついで、彼の指導のもとに、ジャン・ラプランシュが 1961 年に『ヘルダーリンと父の問題』を刊行し、ヘルダーリンをシュレーバーと相似した症例として分析するのである。

ラプランシュのヘルダーリン論にすばやく反応を示したのは、フーコーであった。フーコーにとって、芸術家の心理をすべて説明しつくしてしまうような「芸術家の心理学」は退屈そのものであったが、ラプランシュの著作はそれとは違っていた。なぜなら、ラプランシュは、どのような言葉によっても言い表せないもの、すなわち説明不可能な〈父の名〉のシニフィアンの欠損との関係からヘルダーリンを論じていたからである。このような議論は、後のフーコーの重要なモチーフである「外の思考」の呼び水となった。

こうして、狂気と創造性の問題は、いわゆるフランス現代思想におけるひとつの参照点となった。時代は前後するが、すでにアントナン・アルトーは 1948 年にヤスパースの『ストリンドベリとファン・ゴッホ』に抵抗し、精神医学と一体となった病跡学の言説を鋭く批判していた。また、モーリス・ブランショは 1951 年の「比類なき狂気」のなかで、『ストリンドベリとファン・ゴッホ』を論じた。ブランショは、ヤスパースの議論のなかから「統合失調症は深層（profondeur）が開示される条件となる」というテーゼを取り出し、そこから狂気の特異性、非人称性という考えを導き出した。このような考えが、後にドゥルーズらの議論へと継承されることになる。また、ジャック・デリダは一連の狂気と創造性の問題を『エクリチュールと差異』のなかで論じ、創造行為を行った病者に対する臨床的・批評的な範例化そのものに対して抵抗したアルトーを再評価し、狂気「と」作品という二者を分離して考える病跡学的思考を脱構築した。

こうして、狂気と創造性の問題がさまざまな領域において議論され、およそ 20 世紀中頃には統合失調症における創造性の議論は煮詰まりつつあった。それと同時に、統合失調症という狂気それ自体がそのはっきりとした輪郭を失いはじめ、いわゆる「軽症化」や「病理の瀰漫化」が指摘されるようになった。この流れは 21 世紀に至るまで続いており、現在では創造性と関連する狂気として、統合失調症よりも自閉症（ないし自閉症スペクトラム）に注目があつまっている。まず、統合失調症における創造性と、自閉症スペクトラムにおける創造の二極を、狂気ゆえに作品をつくる草間彌生と、健康ゆえに作品をつくる横尾忠則の対比によって示した。

今日的な視点からみた場合、自閉症スペクトラムにおける創造性を論じるための理論は、ジル・ドゥルーズの『意味の論理学』と『批評と臨床』にあると考えられる。『意味の論理学』では深層と表層が対置され、両者はそれぞれアルトーとルイス・キャロルに依拠した議論がなされているが、今日ではアルトーは統合失調症、キャロルは自閉症スペクトラムであると考えられる。深層を無視し、表層における言葉遊びだけで作品をつくるキャロルにおいては、もはや神の言葉は「隠れたる神」という意味でも現れることがない。このような言語仕様の特徴は、成人の自閉症スペクトラムの患者にもしばしばみられるものである。ついで『批評と臨床』で取り上げられるのは、ルイス・キャロルに加えて、レーモン・ルーセルやルイス・ウルフソンといった、いずれも自閉症スペクトラムの特徴をもった作家である。ドゥルーズは、これらの自閉症スペクトラムの作家を、表層における無意味な言葉遊びや「手法」という観点から分析している。これらの作家は、かつての統合失調症の作家のように自らの外部にある「神の言葉」や「外の思考」に依拠するのではなく、「言語の内部で一種の外国語を形成する」ようにして書く。すなわち、すでにある既存の言語を、外部の侵入によって解体に導くのではなく、むしろその内側からハッキングするのである。そして、このような言語のハッキングこそが、ポストモダンにおける「言語を狂気させること」であるとドゥルーズはいうのである。

このようなドゥルーズの議論に代表されるように、狂気と創造性をめぐる現代の言説は、大きな転換点にある。かつて、プラトンの時代には、狂気において神の言葉が直接的に魂に書き込まれることが創造性の正統性を保証していた。そして、ハイデガーやラカンに代表される「分裂病の時代」に至ると、もはや神が言葉に現前しなくなったことが明らかになったが、詩の否定神学によって創造性はかろうじて神と関係をもつことが可能であった。しかし、現代の創造性は、そもそも神の言葉の現前／不在を前提としないような、「言語の内側からのハッキング」によって駆動されている。ただし、そこで作られる作品が、必ずしも神と無関係であるというわけではない。ドゥルーズは、ハッキングによって形成された「独創的な言語は、神の言語の投影でもありうる」と述べているのである。この言葉は、いまや作家の作品の言葉が、神の言葉の投影であるかどうかは「かもしれない」の位相にあるということを示している。すなわち、それが神の言葉であるかどうかは投瓶通信であり、偶然性に開かれた確率の問題となったのである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 松本 卓也，タジャン ニコラ	４．巻 206
２．論文標題 アフィニティ・セラピー : ラカン派精神分析が注目する自閉症への新たなアプローチ	５．発行年 2019年
３．雑誌名 こころの科学	６．最初と最後の頁 97-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 千葉雅也、國分功一郎、村上靖彦、熊谷晋一郎、松本卓也	４．巻 23
２．論文標題 ロビンソン・クルーソーは無人島で誰に最初に出会うのか : 統合失調症から自閉症へ	５．発行年 2020年
３．雑誌名 精神看護	６．最初と最後の頁 36-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 松本　卓也	４．巻 96
２．論文標題 ヘルダーリンの狂気はいかに論じられてきたか？　病跡学とフランス現代思想	５．発行年 2018年
３．雑誌名 日本病跡学雑誌	６．最初と最後の頁 50-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 松本　卓也	４．巻 1
２．論文標題 創造と「恩寵のドア」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 講談社選書メチエ解説目録（創刊25周年特別版）	６．最初と最後の頁 21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 松本卓也	4．巻 71
2．論文標題 健康としての狂気とは何か――ドゥルーズ『批評と臨床』試論	5．発行年 2017年
3．雑誌名 発達障害の時代とラカン派精神分析―“開かれ”としての自閉をめぐって	6．最初と最後の頁 176-220
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　2件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 Takuya Matsumoto
2．発表標題 Lacanian and Deleuzian Perspectives on Autism
3．学会等名 Deleuze/Guattari Camp 2019（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 Takuya Matsumoto
2．発表標題 L’autisme, d’un point de vue lacanien et deleuzien
3．学会等名 Corps, Art, Folie - La douleur a l’oeuvre（国際学会）
4．発表年 2020年

1．発表者名 松本卓也
2．発表標題 フランス現代思想が問う病跡学の基本問題（シンポジウム「病跡学の基本問題」）
3．学会等名 第66回日本病跡学会総会（招待講演）
4．発表年 2019年

１．発表者名 千葉　雅也、松本　卓也
２．発表標題 思弁的実在論と精神分析　現代の思想・病理・芸術をめぐって
３．学会等名 精神病理学・精神分析学研究室講演会
４．発表年 2018年

１．発表者名 松本　智恵、松本　卓也
２．発表標題 多文化主義時代のマイノリティの精神分析：フランツ・ファノンの病跡
３．学会等名 第65回日本病跡学会総会
４．発表年 2018年

１．発表者名 松本卓也
２．発表標題 ヘルダーリンの精神病と現代思想
３．学会等名 日本ラカン協会第23回ワークショップ
４．発表年 2017年

〔図書〕　計2件

１．著者名 松本 卓也	４．発行年 2019年
２．出版社 講談社	５．総ページ数 384
３．書名 創造と狂気の歴史　プラトンからドゥルーズまで	

1．著者名 上尾真道、牧瀬英幹	4．発行年 2017年
2．出版社 晃洋書房	5．総ページ数 280
3．書名 発達障害の時代とラカン派精神分析―“開かれ”としての自閉をめぐって	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
Corps, Art, Folie - La douleur a l’oeuvre	2020年～2020年

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関